

一八世紀イギリスの「政治的安定」をめぐる

大久保 桂 子

はじめに

一、プラムの「政治的安定」解釈

二、プラム以降の政治史研究

△1▽一六八九～一七一四年——党派対立の確認

△2▽初期ハノーヴァー朝期のトリー評価

三、政治思想史と「政治的安定」の問題

△1▽党派対立の思想的背景

△2▽「宮廷」と「地方」の思想的対立

四、「政治的安定」への視角——むすびにかえて

はじめに

一六八八～九年の名誉革命を一七世紀と一八世紀を分かつ分岐点とすることは、イギリス史上半ば常識化した慣例である。一七世紀イギリスに深刻な対立をよびおこした二大争点——教会問題

および国家における君主と議会の位置づけ——が名誉革命においていちおうの解決をみたことを前提に、動乱の一七世紀から静穏の一八世紀への転換が実現したとする解釈が、なかば暗黙の了解事項として我々のうちに共有されているといってもよいであろう。

しかしながらこの静穏なる一八世紀像は、厳密に言えば一八世紀の政治史にのみ適用されうるにとどまり、⁽¹⁾ 时期的にも一七二〇年代から五〇年代までの比較的短期間にあてはまるにすぎない。

トレヴェリアンが『アン女王治下のイングラランド』で描き出したように、かつてのホイッグ史観でさえ名誉革命後のイギリスを静の時代とみなしていたわけでは決してなかった。にもかかわらず、戦後一九六〇年代後半にいたるまで一八世紀前半の政治史が研究史上の空白期間として放置され、みるべき成果を得られなかったのは、ネイミアおよびそれをうけたウォルコットのテーゼのしからしむるところであった。ネイミア・ウォルコットの政治史

とりわけ政党（正しくは、⁽²⁾非政党）解釈についてはすでにいくつかの紹介もあることなので、ここでは触れない。しかし今日振り返ってみると、わが国で一八世紀前半の政治が究極的には安定したものであったとの通念を抱かせたもう一つの理由は、一九六七年に公刊されたこの時期の政治史の戦後最初の傑作ともいえるべき、J・H・プラムの『イングランドにおける政治的安定の成長 一六七五～一七二五年』⁽³⁾を十分評価していなかったところにあったように思われてならない。プラムの意図は政治的安定の確立ないし常態性を証明することではなく、その成長の背後に存在していたいくんだ要因を説明することに置かれていたにもかかわらず、「安定」のみが安易に強調されがちな現状は、わが国の一八世紀研究の今後にとって不幸なことである。

以下に述べていくように、現在英米で進行しつつある一八世紀前半の政治史研究の出発点がプラムのこの著書にあったことは疑いがなく、さらにいえば、本書は一七世紀から一八世紀への展望を従来とは異った角度から提示した点でも特筆すべき業績であった。例えば、一七～八世紀のイギリスを革命からその終息へという旧態依然たる発想を離れて、「テューダー型貴族政」から「ホイッグ型貴族政」への移行という斬新なパースペクティヴに立って理解し直そうとした論文集『三つの英国革命——一六四一、一六八八、一七七六年』⁽⁴⁾は、相互に対話を欠いたままの一七世紀と一八世紀のイギリス史研究者の意表を衝く近年の注目作であったが、その序文においてポーコックはこうした新たなアプローチを可能にした三つの業績の一つにプラムのこの著書を挙げている。

同じ論文集に「一七世紀イギリス諸革命の帰結」⁽⁵⁾を寄せたストーンも、プラムの視角をほぼそのまま受け入れて、一六二一年から一七二一年を「激動の一世紀」とみなす新しい時代区分法を提示している。

発表からすでに二〇年近くを経た現在でもなおこの時期の政治史の必読文献の筆頭に挙げられる本書を正しく評価し、それがその後の研究にどのように発展していったかを跡づけておくことは、したがってあながち無意味な作業ではあるまい。このような趣旨に即して、以下の小論ではプラムの「政治的安定」解釈を概観したうえで、それに照らしつつ近年著しい進捗をみせている一八世紀前半の政治史および政治思想史研究を整理しておくことにしたい。

一、プラムの「政治的安定」解釈

J・H・プラムといえば、二巻のウォルポール伝やペリカン版『一八世紀のイングランド』をはじめとする一八世紀イギリス史、さらにはイタリア・ルネサンス論や歴史学の今日的課題に対する発言でも知られる戦後のイギリス近代史界を代表する歴史家の一人であり、現在ケンブリッジ大学名誉教授の席にある。⁽⁶⁾なかでも一九六五年オクスフォード大学でおこなわれたフォード記念講義『イングランドにおける政治的安定の成長 一六七五～一七二五年』⁽⁷⁾は、一八世紀イギリス史の権威としての名声を一段と高めた著者の代表作に数えられる。本書の特徴は、クロノロジカル

な政治史叙述ではなく、著者独自の「政治的安定」という概念を用いて、世紀のかわり目をはさんだ五〇年間の曲折に満ちた政治の底流の推移を解き明かした点にある。

著者のユニークな視点は、本書が一六八九年という通常の時代区分点を意識的に採用せず、王政復古期半ばからウォールポール政権確立までの半世紀間を対象に据えているところに端的にあらわれている。著者によれば、「政治的安定」——「社会が、政治上の諸制度およびそれを運営するさまざまな人間・官吏の集団を容認している状態」という著者の定義は歴史概念としては必ずしも精緻なものとはいえないが——とは近代ヨーロッパ史上ごく稀に見当たらぬ現象であって、イングランドもその例外ではない。チューダー朝以来、イングランドの君主政は地方権力との適切なバランスを確保しながら社会が「容認」しうる国家機構とその運営方法を見出そうと努めてきたにもかかわらず、王政復古期にいたってもその糸口すらつかめぬ有様であった。あまつさえ名誉革命は、議会と結びついた地方権力の掌握という君主政としての積年の課題の克服が完全な失敗に帰したことを象徴する事件に他ならなかった。「政治的安定」という視点に立つかぎり、名誉革命は王政復古期の——さらにいえば一六世紀以来の——政治的不安定を解消するどころか、むしろそれを温存し助長する結果を招いたからである。名誉革命によって議会は君主政にとってもっとも望ましくない地位、すなわち国王政府に対する自立化傾向を強めることになった。「手なづけようのない立法院、加うるに空っぽの国庫では、政治的アナークへの片道切符」に等しい。に

もかわらず、アナークの危険性に満ちた状況の水面下では、政治的安定の成長をばぐむいくつかの要因が生じつつあった。一見逆説的にもみえるこの事態を、プラムは大きく次の二点から説明する。

第一は、王位継承排除危機下の議会（一六七九～八一年）の体験、さらには一六九四年の三年議会法によって、選挙戦が激化し、選挙コストのインフレを招来したことである。選挙戦それじたいは、一七世紀前半以来増加の一途をたどった有権者の政治参加を許し、党派対立の温床を提供するものであったから、むしろ政治的不安定の一つの要因であったといわねばならない。しかし一六八九年から一七一四年にかけて一八回もおこなわれた総選挙にともなう、多額の費用を要する選挙戦が頻発したことは、エリート内部ではより多くの富を持ち、度重なる選挙出費に耐える者が生き残るという種の淘汰現象を伴った。政治的不安定の代名詞でもある選挙戦の激化は、したがってある面では地域ごとの政治エリート層の構力構造を整序し決定づけ、結果としては富を持つ大物たちによる寡頭政を招来する。寡頭政の構力構造がひとたび確定されると、選挙は次第に無風化し、投票をつうじての有権者の政治参加も空洞化され、有権者は政治から実質的に排除されることになる。有権者が政治参加の途を閉ざされていることもまた、政治的安定の基盤の一つとなる。このように、選挙戦の激化は政治的不安定から寡頭政の形成は政治的安定へという逆説的なプロセスを、選挙コストの急騰がもたらす権力構造の確定作用から解き明かしたプラムの手腕は、卓抜なものといわざるを

えない。

第二に指摘される政治的安定の要因は、政府が悲願としてきた議会コントロールの手段としてのパトロニジ（人事権）にかかわる。王政復古期から徐々に規模を拡大し、名譽革命後の対仏戦と平行して急速に膨張をとげた行政府なканずく大蔵省および陸海軍は、政治的安定の最大の前提を提供した。なぜなら政治的安定は、行政府の大きさがそれに関心を持ちうる人々の欲望を満たすほどに大きく、かつ行政府が議会に確実に侵入・定着したとき初めて達成されるからである。なるほどパトロニジの拡大は直接には政治家間の派閥抗争を煽り、「官廷」に対する「地方」の嫉妬をかき立てたかもしれない。しかしむしろ縮小傾向にあった旧来の官廷ではなく、行政府諸ポストの飛躍的增加こそが、議会操作の奥の手であるパトロニジ行使を行政府に大幅に認め、政治エリート全般に権力と権威の媚薬をゆき渡らせたのである。⁽⁹⁾

しかしながら以上二つの要因の前に立ちはだかつていた障壁は、政治的安定を実現させるには大きすぎた。すなわち、名譽革命からアン女王治世に熾烈をきわめたトーリとホイッグの党派抗争がそれである。この点にかんして、戦後しばらくの間この時期の政治史の正統説を築いたとみなされていたウォルコットに対するプラムの批判は、きわめて手厳しい。とくにウォルコットが議会内の派閥構造にのみとらわれ、当時の政治史の決定的要因である有権者の増加と選挙戦の意義を見過している点に、プラムの批判は集中する。党派対立とは第一義的には選挙区における地方権力をめぐる抗争にその現実が認められるべきであり、当時の言論

戦もまた有権者という実質的な標的を狙いとするものであった。

ここで著者は当時の両派の政治党派としての性格変化を綿密に跡づけている。一六九四年は両派にとって一大転機であった。それはホイッグが「ジャント」を中心に積極的な戦争・財政策を採用して「新ホイッグ」に転換する契機となり、いっぽうトーリはホイッグの在野勢力を糾合して野党「新トーリ」を形成したからである。かくしてかつてのシャフツベリの党ホイッグは利権にさとい実力者集団に、かつての君主政・国教会擁護者たるトーリは、小さく安上がりな政府を望む野党的「地方」理念の代弁者へと変身をとげたのであった。しかし両派ともに究極の目標が権力の掌握にあったことにはかわりはない。問題は、いずれの党派が政権を握っても、政府に非妥協的態度を崩さぬ「地方」的反感が根強く、政権の安定化を許さなかったことである。アン女王が没した一七一四年においても、こうした状況が政治的安定を果たせぬ夢に終わらせるかにみえた。

しかし、一七一五年以降のトーリの雪崩式瓦解とともに成立したホイッグ単独政権は、ウォルポールの卓抜な力量を得て、過去数十年間に準備されていた地方社会における寡頭政と行政府パトロニジを政治的安定に直結させることに成功した。すなわち政治的安定は前述のような潜在的要因に加えて、トーリの四散とウォルポールの覇権といういわば偶然と人為の複合的契機によって、一七一五年以後の十年間で「水が氷になるように」瞬時に達成されたのである。

以上の要約からも明らかなように、本書の趣旨は「政治的安定

の成長」よりもむしろ「政治的不安定の解消」に置かれているとみなければならぬ。プラムが挙げる政治的安定の三要件——(1)単独政党政権 (2)立法府が行政府の確実なコントロール下にあること(従来の通説とは逆であるが、ここにプラムの真骨頂が認められる) (3)経済・社会・政治上の権力を握る人々のあいだの一体感——がウォールポル体制下の「ヴェネチアの寡頭政」において実現されたというとき、そこには偶然と必然が錯綜した因果関係を織り成している。安定の潜在的要因はそれのみでは安定をもたらすとは限らず、安定の最大の阻止因子である党派抗争は、半ば偶然の所産として鎮静化したというほうが正しい。

しかしここで注意すべきは、著者の意図は第一にはウォールコットを断罪しつつ当時の党派対立の実在を再確認することに置かれてはいるが、同時に当時の政治史を狭義の議会史から解放すべきことを示唆していることである。プラムは「政治的安定」といういささか不明確な概念をあえて創出し、そのむしろネガティブな「成長」過程を描いているのであって、そこでは有権者や総選挙、行政府などの諸要素が単なる脇役以上の重きをなす。ネイミアから受け継がれてきたおそらく特異なまでの議会史偏重こそ、プラムが挑戦し、続く歴史家がとり組むべき課題であったように思われる。

二、プラム以降の政治史研究

△1▽一六八九〜一七一四年——党派対立の確認

一九六〇年代から一九七〇年代にかけては、プラムの提言に沿った一連の政治史研究の収穫が得られた時期であった。まずアン女王治世では、ホームズの『アン女王時代のイギリス政治』とスベックの『トリーとホイッグ——一七〇一〜一七一五年の選挙区内抗争』⁽¹¹⁾によって、議会内の党派構造分析と選挙区内の選挙戦という議会内外の両面から当時の党派対立が検証された。この二著に代表される諸研究は、その方法において一定の特徴が認められる。まず議会内の党派分析では、各議員の投票行動を採決リスト division list を手がかりに追跡し、それをつうじて個々の議員の党派帰属心の一貫性を確認する作業である。⁽¹²⁾このような議員の追跡調査にかんするかぎり、これらの研究が方法論上ネイミア史学を受け継いでいる点は注意を要する。ホームズの前掲書はしばしばウォールコット説を打倒した反ネイミア史学の代表作とうけとられがちであるが、ホームズの批判はネイミアが一七六〇年について引き出した結論——「政府与党」「政治家」「独立派」からなる議会構造図——をそのまま世紀初頭の議会に適用することに向けられているのであって、ネイミアが案出した伝記的方法の有効性はホームズにおいても、さらにその後の研究においても、失われていない。いっぽうスベックをはじめとする選挙区分析では、有権者の重要性というプラムの指摘をうけつつ、ポール・ブックをコンピュータ処理して投票傾向を分析するという洗練された手法が採用されて、有権者の自発的な選択を示す豊富なデータが得られている。⁽¹³⁾

方法においてネイミア史学を受け継ぎ現代の選挙分析テクニッ

クを活用しながら、これらの研究はアン女王治世の政治史をトリーとホイッグの深刻な分裂に彩られたものとして描き直すことに成功した。同様の手法を採用したホーヴィッツの『ウィリアム三世治下の議会・政策・政治』⁽¹⁴⁾は、一六八九年から一七〇二年を対象に、議会史を中心としながらも選挙情勢をも視野にとり入れた詳細な叙述を生み出した。これによって名誉革命直後の混乱を経て一六九四年ごろからトリーとホイッグの対立が鮮明化していくことが確認された。かくして一七七〇年代までに、ウィリアム・アン両治世は議会においても、選挙時にとりわけ対立が顕在化する地方政治社会においても、党派対立が深く浸透した時代であったとの解釈が定着したように思われる⁽¹⁵⁾。

ここでこうした第一世代による党派対立の確認をプラムの政治的安定解釈を座標軸として把え直してみると、これらの研究は安定に先行したいわば不安定状態としての政治的分裂の解明に集中していたことができる。前述のようにプラムは政治的安定の潜在的要因として一六七〇年代以降の寡頭政の形成と行政府の拡大を挙げているのであって、安定達成の決定的契機はハノーヴァー朝成立後の十年間にあるとみなしていた。ホームズ、スペックらはウォルポール体制下の安定、あるいはこの安定をもたらした直接的契機については完全にプラムに追隨していたようにみえる。スペックが一七一四年から六〇年を対象とする概説書に『安定と確執』⁽¹⁷⁾というタイトルを採用したことは、その意味できわめて象徴的である。スペックによれば一七一四年以前の「分裂した社会」⁽¹⁸⁾とは対照的に、初期ハノーヴァー朝下ではトリーとホイッ

グは「単一の支配階級」に融合したのであって、それが「安定」のあらわれに他ならない。したがってこうした安定下の政治家間の対立は基本的には「確執」以上のものとはなりえないことになる。このようなスペックの解釈が、プラムが規定した「権力を握る人々のあいだの一体感」をうけたものであることはいうまでもあるまい。

かくして反ウォルコットの旗手として名を揚げた第一世代の歴史家たちは、一七一四年を境とする「分裂」と「安定」のコントラストをいっそう鮮明に示したことによって、初期ハノーヴァー朝期の政治にかんしては、かつてネイミアが描き出した静態的な歴史像に接近することになった。ここで改めて問われねばならないのは、なぜ一七一四年以降急速に安定が実現されたのか、そのときイギリスの政治に何がおこっていたのか、という問題である。政治的安定の出発点が一六八九年ではなく一七一四年にあったとすれば、初期ハノーヴァー朝期の政治史こそが政治的安定達成の原因を解く鍵を握っているとみなされなければならない。

Ⅱ 初期ハノーヴァー朝期のトリー評価

戦後の初期ハノーヴァー朝政治史の出発点は一九七〇年であったといつてよい。しかもそれはプラムの関心とは全く異なる角度から発せられた衝撃的な問題提起によるものであった。ネイミア史学の総決算ともいふべき『庶民院』以来およそ一五年ぶりに、初期ハノーヴァー朝下のホイッグ長期政権時代を対象とする『庶民院 一七一五〜一七五四年』⁽¹⁹⁾が議会史研究財団から刊行されたの

がそれである。議員の伝記的調査に序論を付した本書の構成と方法じたいは、まさしくネイミア史学の直系というにふさわしい。しかしながら問題は、本書の「序論的概観」⁽²¹⁾で執筆者クルクシャンクスが提示した当時の議会党派解釈にある。

プラム以来の「安定」解釈の有力な根拠の一つは、ホイッグの単独支配を必然化したトリーの急速な崩壊であった。プラムによればこれは第一にトリーに強力な指導者層が欠けていたこと、第二に一六九〇年代から浸透していた「地方」的要素と政治党派としての権力欲が衝突せざるをえず、本質的自己矛盾をはらんでいたこと、第三に一七一五年のジャコバイトの反乱への一部トリーの負担、のしからしむるところであった。ホイッグに絶対的の信任を置くジョージ一世の下で、ホイッグがこれらの弱点を一挙に突いてトリーの大パージを断行し、一七二五年までにトリーを権力から完全に占め出したことは、史実の示すところ議論の余地がない。プラムはこれを安定達成の契機としての「単一政党政権」とみ、スペックはさらに「単一の支配階級への融合」と解したが、これは一七六〇年当時の議会においてトリーとホイッグの区別は「気分やものの考え方、社会的なタイプ」においてのみ認められるにすぎないとし、トリー主義は「単なるメンタリティと化した」⁽²²⁾と断定したネイミアの前提にも連なるものであった。

これに対しクルクシャンクスの「序論的概観」は、この時期の議会史は基本的にはホイッグとトリーの二分法においてのみ書かれる、というおおかたの予想に反した見解を明示した。ホイッグ内部では、権力を握る与党勢力と権力の配分にあずからない野

党勢力との対立、すなわちネイミアいうところの「宮廷」と「地方」の構図は確かに存在した。しかしトリーは決して「独立派カントリ・ジェントルマン」と化したわけではなく、明確な目的意識をもった政治党派としての一体性を保ち続けており、その目標は自己の復権を保証する亡命ステュアート家の復位であった。すなわち、初期ハノーヴァー朝下にも党派としてのトリーは存続し、かれらはジャコバイトであった、とクルクシャンクスは主張したのである。⁽²³⁾

このトリー・ジャコバイト解釈は、一八世紀政治史研究の共有財産となっているネイミア史学の正統な方法論を適用したうえでの結論であっただけに、即座には反証不可能であつたように思われる。B・W・ヒルもこの新テーゼを一部継承しつつ、かつての主張を放棄して初期ハノーヴァー朝期のトリーの存続を認める立場に転向した。⁽²⁴⁾しかしもしもトリーがホイッグ体制に和合せず、現体制の転覆をはかるジャコバイトとして生き続けていたとすれば、「安定」解釈の論拠であつた「単一の支配階層」の「一体感」は成立しえず、安定そのものを疑問視せざるをえなくなる。いいかえればトリー・ジャコバイト解釈は、「宮廷」対「地方」の図式に固執する旧ネイミア史学⁽²⁵⁾に対してではなく、実はプラム以降の「安定」解釈に対する全面的な挑戦であつた。

クルクシャンクスのトリー・ジャコバイト解釈に対する「反論」は、一九八〇年代に入つて新世代によるトリー研究の出現によつてようやく始められた。コリーの『寡頭政に挑む——トリー党一七一四〜六〇年』⁽²⁶⁾（一九八二年）がそれである。コリーはこの

大著においてクルクシャンクス説のある部分——初期ハノーヴァー朝期のトリーは指導者と結束力を備えた党であったこと——を受容しつつ、トリーがジャコバイトであったとする解釈を退けて、トリーの主流は現王朝下での政権奪回を望むハノーヴァー・トリーであったと主張した。現在のところ、初期ハノーヴァー朝政治上の最大の論争点は、トリーがジャコバイトであったかハノーヴァー・トリーであったかという問題にあるようにみうけられるが、この時期のトリー研究の難題は、史料上の制約ゆえに結論がいずれも仮説の域を出ない点にある。トリーの行動を説明する国内史料はごくわずかしかなかった、いっぽうトリーのジャコバイト活動参加の一貫性に対する証明も国外のジャコバイト側史料に依拠しているかぎり、つねに反論の余地を残しているといわねばならない。⁽²⁷⁾

しかしながら両者の見解の相違は、「政治的安定」解釈を視座とすればさして大きくはない。ジャコバイトであれハノーヴァー・トリーであれ、一七一四年以降一七五〇年代までトリーが政治党派として存在しつづけたという認識で両者は一致しており、この点では初期ハノーヴァー朝期もまた「安定」ではなく「分裂」した社会とみなさざるをえないからである。コリーはこの点をさらに推し進めて、プラムが定義したような「政治的安定」状態は実際には名誉革命後アン女王治世までに獲得されており、一七一四年までの党派対立の根底には政策上のコンセンサスが存在していたとみる。⁽²⁹⁾したがって初期ハノーヴァー朝のホイッグ政権がこのコンセンサスを作法的に掘り崩してホイッグ独裁をはかったこ

とこそ、きわめて重大な不安定要因といわざるをえない、との結論を引き出した。

かくしてプラムおよびそれに続く第一世代が想定していた初期ハノーヴァー朝下の「安定」像は、第二世代によるトリー研究の深化によって急速に陰がさし始めたようにみえる。守勢に立った第一世代の反応については後段にゆずることとし、次にこれまで述べてきた政治史とは多少異なる側面からの「安定」説への問題提起を確認しておくことにしたい。

三、政治思想史と「政治的安定」の問題

△1Ⅴ党派対立の思想的背景

一八世紀の政治思想史はながくロックという巨星がすべての光源とみなされてきた領域であった。一八世紀の市民社会シヴィル・ソサエティのバイブルはロックであり、それは名誉革命という政治的事件の事実としての重みによって、いっそう神聖視されていたように思われる。しかし注意深くみれば、一八世紀の現実の政治体制とロックの市民政府論との間に大きなズレのあることは容易に感知できるのであって、このズレを不問に付してきたこともまた、一八世紀の——正しくは一八世紀後半の——政治史に思想的後ろだての存在を認めようとしなかったネイミア史学のもたらした後遺症であったといえる。そしてこのような政治に直接かかわる思想史研究の空白は、一八世紀前半の「政治的安定」解釈を側面から補強していたともいえよう。

もちろんプラムを出発点とする第一世代の歴史家によって、アン女王治世までの党派対立が人脈や政策面のみならずイデオロギー上も埋めがたいものであったことは指摘されていた。しかし実際にトリーとホイッグがいかなる争点をめぐって原則・理念上の攻防を繰りひろげたかは十分解明されていなかったといわねばならない。プラムの前著から十年後の同じフォード記念講義にこのテーマを選んだケニヨンの決断は、したがってまさに時宜にかなったものであった。

『革命の原則——党派政治 一六八九—一七二〇年』⁽³⁰⁾（一九七七年）において、ケニyonは副題が示すように第一世代によって確認された党派対立を前提に、この対立の思想的背景の解明を試みた。ケニyonの出発点は、当時の現実の政治においてロック思想の直接的反映がほとんど認められないという事実認識にある。さらに重要な事実、名誉革命後のイギリスでロック思想とはいわないまでもホイッグの政治観——「革命の原則」——が広範な支持を得た主流意見となりえたことはなかったこと、一七一五年以前には政府と議會をホイッグが完全に掌握するような状態は存在したことがなく、つねに「地方」的要素を含んだトリーが優勢であったことである。以上の明白な事実を下敷きに、ケニyonは名誉革命以降のホイッグとトリーの苦渋に満ちた理念上の衝突を当時のパンフレット類を渉猟しつつ克明に跡づけている。一七二〇年にホイッグは長年の劣勢を克服して権力においては独裁的地位を確立していたかもしれない。しかしこのとき革命以来ホイッグの原則とみなされてきたものの多くはすでにホイッグの属性で

はなくなっていた。かれらの思想的支柱は、ハノーヴァー朝に具現されたプロテスタント王位継承以外には残っていない。およそ政治上の改革すべてに道を閉ざし、庶民院を行政府の求める資金を認めるだけの「マシーン」となさしめたホイッグ体制に、かつての「革命の原則」の唱導者の面影を見出すことはできない。国教会体制の護持と君主への服従を固守せんとしたトリー主義が敗者であったとするなら、民の声を映すことを謳ったホイッグ主義もまた敗者なのである。

ケニyonはハノーヴァー朝成立後のホイッグの極端な保守化を「墮落」と決めつけ、「政治的安定」という心地よい響きを持つイメージに釘をさす。「イギリスは『安定』なるものに落ち着いたといわれてきたが、実は鬱血状態に陥ったのである。無法で危険な騒擾が頻発するような体制下に、安定など無いに等しい。」ケニyonのこのようなホイッグ批判は、むしろ一九世紀のホイッグ史観に先祖帰りをしているようにすらみえる。⁽³¹⁾

Ⅷ 2 「宮廷」と「地方」の思想的対立

このようなトリーとホイッグのイデオロギー上の拮抗とはおよそ異った視角から、「鬱血状態」の一八世紀政治思想に息を吹き込む探究がなされるようになったことを、次に紹介しておこう。一九六〇年代以降アメリカ独立革命のイデオロギー的背景に新たな解釈がなされた結果、一七世紀末から一八世紀中葉にかけての、党派対立とは別の政治思想類型がにわかに脚光を浴びることになったのがそれである。⁽³²⁾

このような研究視角では、一六九〇年代に「オールド・ホイッグ」を、一七二〇年代に「地方」^{カンストリ}を名のって活躍した時論的政治著述家たちが、一七世紀の共和主義理念と一八世紀後半の本国および植民地のラディカリズムの橋渡し役として重視される。この「地方」理念は、君主政と革命をめぐるトリーとホイッグの争点とは性格を異にし、名誉革命後の新たな国家のありかた——行政府の拡大とそれにもなう立法府の権限縮小——を「腐敗」と断罪した、すぐれて現実的な体制批判者であった。こうした「地方」の批判者に対抗して行政府側は政府と現体制擁護を目指して「宮廷」の論陣を張る。かくして一八世紀前半とりわけウォルポール体制期は政治思想不毛の時代ではなく、国家の肥大化に対する飽くことなき非難が繰り返された論争かまびすしい時代と捉えられることになった。こうした政治思想史研究者のうち、ベイリンは主に一六九〇年代とウォルポール体制下の政府批判の直接的継承関係を認めているのに対し、ポーコックは「地方」理念の源流をハリントンに見出し、その形成者を「ネオ・ハリントニアン」と命名する。初期ハノーヴァー朝期の思想上の「宮廷」対「地方」解釈は、クラムニツクのボーリングブルック研究やディキンソンの思想史概説にも採用されている。⁽³³⁾

ここでポーコックの壮大にして難解をきわめる思想史パースペクティヴにいたずらに紙面を費すべきではなからう。⁽³⁴⁾問題は次の二点に求められる。

第一に、思想類型としての「宮廷」と「地方」と、前節で述べた政治上のトリー（ないしジャコバイト）とホイッグの対立図式

とはどのように両立しうるか、という問題がある。⁽³⁵⁾とくにウォルポール政権下の議会においてトリーと在野ホイッグが連合野党を結成して「地方党」^{カンストリ・パーティー}を名のり、「地方」理念をもって政府攻撃をおこなった事実が説明されねばならない。⁽³⁶⁾この点にかんする第二世代のトリー研究者の立場はある意味ではネイミア的であるといえる。すなわち「地方」理念は単なる戦略上の武器として採用されたにすぎず、在野ホイッグは本心では権力を求め、いっぽうトリーの思想的基盤は別のところに——クルクシャンクスはジャコバイト主義に、コリーは国教会および君主政ハノーヴァー朝支持に——見出されねばならない、とみるのである。

第二に重要な点は、これらの思想史研究によって、プラムが「政治的安定」の要因に挙げていた行政府の拡大による議会の従属化という事態が、初期ハノーヴァー朝期に入ってもつねに批判にさらされていた事実が明らかにされたことである。そうであったとすれば、「社会が政治体制とその担い手を容認する」ような状態が真に存在していたといえるのであろうか。この点にかんするベイリンおよびポーコックの説明はきわめて示唆的である。ベイリンは「宮廷」と「地方」いずれの論客も「基本的には同じ一連の信念に基づいて書いていた」のであって、両者の差違は強調点の置きどころの違いにすぎないと述べており、またポーコックもやや異った文脈においてではあるが、「宮廷」と「地方」は共棲的なものであったことを認めている。二つの理念が本質的には原理的対決を回避したものであったとすれば、それは寡頭政下の国制観に一定のコンセンサスが得られていたことを示すものとい

えよう。

しかしながら、コンセンサスの上に成り立っている寡頭政であっても、何らかの対立する政治観によって分裂する場合はたしとないと言い切れるのか。これは一八世紀のみならず近代イギリス史を考えるさいつねに再考を要するきわめて重大な問題である。ここでプラムが下した「政治的安定」概念の定義の究極的な曖昧さにゆき当たらざるをえない。「社会が容認する」政治体制としてのホイッグ単独支配体制は、トリーリの存命が力説されている今日、どこまで「容認」されていたというのであろうか。

「経済・社会・政治上の権力を握る人々のあいだの一体感」とは何を抛りどころとする、いかなるレベルのコンセンサスなのか。そもそも、コンセンサスが存在していることは「政治的安定」と同じであるのか。

プラムの「政治的安定」をめぐるテーゼは、以上述べてきたように、近年さまざまな疑問や留保にとり囲まれつつあるようにみえる。そこで最後に、「政治的安定」にかんして最近認められる新たなアプローチを紹介して、今後への展望をおこなっておくことにしよう。

四、「政治的安定」への視角——むすびにかえて

「政治的安定」解釈に向けられたさまざまな批判に対する反応として最近目につくひとつの傾向は、安定を政治的ファクターのみから説明することを避け、よりひろい社会的背景において理解

しようとする立場である。すでにプラム自身、一七世紀後半以降のイギリスの人口増加と経済の多様化が政治的安定の背景に存在していたこと、さらに支配階層たるジェントリ層の経済基盤の拡充がかれらの「一体感」の基盤であったことを指摘していた。その後プラムが政治史を離れ、一八世紀イギリス社会の多様な発展⁽³⁷⁾に関心を集中しているようにみうけられるのは印象的である。前述のスペックの『安定と確執』では、党派対立にとらず深刻であった支配階層内の利害対立——土地利害と金融利害の——が一七二〇年の南海泡沫事件以降大幅に鎮静化したという説明を加えていたが、こうした社会経済上の視点をさらに包括的に打ち出したのは、同じ第一世代に属するホームズである。⁽³⁸⁾

ホームズは一七世紀後半以降民衆ラディカリズムがエリート層の政治抗争にほとんど影響を与えていない事実に注目し、それは政策上の方策ではなくより長期的な経済・社会条件の好転の結果であると論じるとともに、支配層のあいだに「一体感」を生み出した諸要因を政治以外の社会的変化の中に求めようとする。ホームズの近著『オーガスタン時代のイングランド』⁽³⁹⁾は、こうしたエリート層の社会的融合を促進した要素として専門職および政府役職の意義——これもやはりプラムが指摘していた——を確認したものである。エリート内の原理原則上ないし利害上の対立を解消させた背景を追求して王政復古期中葉まで逆のぼっていくうち、ホームズはアン女王治世を「分裂した社会」と捉えていたかつての解釈を修正し始めているようにみえる。

しかしこのように政治史に社会史を接合することは、かえって

混乱を招く恐れ無しとしない。プラムも述べていたように、政治的安定にとって社会的安定は必須の先行条件ではあるが、社会的には安定していても政治的に分裂している社会は歴史上十分存在しうる。トリーが中小シェントリの代弁者であり、ホイッグが大貴族と商工業者の擁護者であるとする通説は両派の抱いていた理念においてはある程度正しいにしても、両派の構成員の実態とは必ずしも一致しないことは、イギリスにおける一八世紀政治史研究者のあいだではもはや常識に属するといつてよい。したがってトリーとホイッグの政治上の分裂に直接の社会的対立が伴わないからといって、その分裂が表層的なものにとどまるとみなすことは、政治史にとって必ずしも有益な発想とはいえない。ホームズがこの近著を「社会史」と位置づけたことは、その意味ではけだし至当といふべきであろう。

「政治的安定」に対する最近のアプローチで注目すべき第二の視点は、当時のイギリスをこの島国の外側から見極めようとするものであつて、これは前述のジャコバイトへの関心の増大に呼応しているように思われる。最近出版されたウォルポール時代を対象とする論文集⁽⁴⁰⁾に編者ブラックが寄せた序論「はたして政治的安定の時代か？」⁽⁴¹⁾はこのような視角を提示したものと見て注目に値する。ブラックは、名誉革命がウィリアム三世を即位させたことによつて、当時のヨーロッパ諸国の政治的安定の基盤であつた世襲君主政の原則を侵害した事実を重視する。これによつて王位請求者・亡命ステュアート家が常態的に存在するようになったことは、諸外国勢力にイギリス介入の格好の糸口を与え、安定の根幹

である王朝主義に恒常的脅威をもたらした。すなわち一六八九年以後のジャコバイト問題は、すぐれてヨーロッパ国際関係の視点に立つとき、イギリスの重大な政治的不安定要因とみなされなければならない。ジョージ一世の即位によつてイギリスはハノーヴァーと同君連合の関係に入り、しかもこのイギリスとは、一部貴族層を懐柔しようやく議会同盟にこぎつけたばかりのスコットランドと、嚴重な監視下に置かれた植民地アイルランドを含む「ブリテン」であつた。この「イギリス」が抱えた「英国統合問題」「British problem」と、とりわけその帰趨の鍵を握るフランスの動向次第では、政治的安定は望むべくもなかつたのである。

ここで改めて顧ると、従来の政治的安定をめぐる議論がイングランド国内史にのみ集中してきた観は否めない。それは確かに政治史に豊富な蓄積をもたらしたが、しかし名誉革命であれハノーヴァー朝成立であれ、ヨーロッパ国際関係の文脈において把握されるべきであり、単純な王朝史観や「外交」史にとどまらない国際関係史の視点を国内政治史に導入することが、とりわけ一八世紀政治史の緊急の課題であることを痛感せずにはいられない。

一九六〇年代以降きわめて精力的におこなわれてきた政治史研究は、これまで述べてきたように「政治的安定」という時代評価に多かれ少なかれコミットすることを余儀なくされてきた。プラムのテーゼに対する批判や修正は、⁽⁴²⁾以上の諸点のほかにも、議会外の政治活動⁽⁴³⁾（特に近年の都市研究が重要であろう）、国教会と

非国教徒問題⁽⁴⁴⁾、民衆運動⁽⁴⁵⁾などの視点からの提出されうるし、プラムもそれを歓迎するであろう。最近再び隆盛となりつつある議会議史では、議会議史研究財団の『庶民院』の一六九〇年から一七一四年を対象とする部分の刊行が待たれるところである。

もっとも、いささか厳密さを欠いていたプラムの定義を離れれば、一八世紀のイギリスが相対的に安定した社会であったとの認識は依然として強力である。キャノンの一八世紀貴族層研究⁽⁴⁶⁾、ストーンの地主エリート層の詳細な追跡調査⁽⁴⁷⁾、あるいは一八世紀後半のイギリスが政治革命を回避するにいたった背景を説明したクリステイのフォード記念講義⁽⁴⁸⁾などの近著は、いずれもそのような認識を共有しているように思われる。とはいえ、「安定」が「変化」や「革命」におとらず歴史学の探求に値するという発想じたいは、決して古いものではない。ネイミアの特異な視点を別とすれば、それはおそらくプラムに始まるといっても過言ではないように思われる。その意味で『政治的安定の成長』はイギリスの一八世紀研究に一段階を画した業績であるにとどまらず、全体としての近代イギリス史像の構築にもすぐれた導き手の役割を果たしつつけるに違いない。

註

- (1) G. M. Trevelyan, *England under Queen Anne: A Trilogy*, 1930-34.
- (2) 松浦高嶺「一八世紀」(青山吉信他編『イギリス史研究入門』山川出版社、一九七三年)。浜林正夫『イギリス名

誉革命史』上・下、未来社、一九八二～三年、下巻、二五九ページ以下。同「名誉革命体制の成立——ウォルコット説をめぐって」(『イギリス史研究』二七、一九七九年)。

- (3) J. H. Plumb, *The Growth of Political Stability in England 1675-1725*, 1967.

- (4) J. G. A. Pocock ed., *Three British Revolutions: 1641, 1688, 1776*, Princeton, N. J., 1980.

- (5) I. Stone, 'The Results of the English Revolutions of the Seventeenth Century', in *ibid.*

- (6) プラムの主要業績は以下のとおり。

England in the Eighteenth Century, Penguin Books, 1950; *Sir Robert Walpole: Vol. I, The Making of a Statesman*, 1956; *Sir Robert Walpole: Vol. II, The King's Minister*, 1960; *The First Four Georges*, 1956; *The Renaissance*, 1961 (石上良平訳『イタリヤ・ルネサンス』筑摩書房、一九六八年); *Men and Places*, 1963; *Crisis in Humanities*, 1964; *The Death of the Past*, 1969 (鈴木利章訳『過去の終焉』法律文化社、一九七五年)。詳しい著作目録は 'J. H. Plumb: A Select Bibliography', in N. McKendrick ed., *Historical Perspectives: Studies in English Thought and Society in honour of J. H. Plumb*, 1974.

- (7) アメリカ版は *The Origins of Political Stability in England 1675-1725*, Boston, 1967.

- (∞) cf. J. H. Plumb, 'The Growth of the Electorate in England from 1600 to 1715', *Past and Present* (274-P.P.), 45, 1969.
- (9) したがってこの時期の行政史の重要性は疑う余地なく。
P. G. M. Dickson, *The Financial Revolution in England 1688-1756*, 1967; E. A. Reitan, 'From Revenue to Civil List, 1688-1702', *Historical Journal* (274-H.J.), XIII, 1970; C. Roberts, 'The Constitutional Significance of the Financial Settlement of 1690', *H. J.*, XX, 1977; H. Rosevare, *The Treasury: The Evolution of a British Institution*, 1969; *idem*, *The Treasury: The Foundations of Control*, 1973; C. Brooks, 'Public Finance and Political Stability: The Administration of the Land Tax, 1688-1720', *H. J.*, XVII, 1974; C. Clay, *Public Finance and Private Wealth: The Career of Sir Stephen Fox 1627-1716*, Oxford, 1978; L. K. J. Glassey, *Politics and the Appointment of the Justices of the Peace 1675-1720*, Oxford, 1979.
- (2) G. Holmes, *British Politics in the Age of Anne*, 1967.
- (3) W. A. Speck, *Tory and Whig: Struggle in the Constituencies 1701-1715*, 1970.
- (2) I. F. Burton, P. W. Riley & E. Rowlands, 'Political Parties in the Reigns of William III and Anne: The Evidence of the Division Lists', *Bulletin of the Institute of Historical Research* (274-B. I. H. R.), Special Supplement, 7, 1968. この世襲藩閥の政治家が作成した總覧のすぐれた効果は、H. L. Snyder, 'Party Configurations in the Early Eighteenth-Century House of Commons', *B. I. H. R.*, XLV, 1972. cf. A Newman ed., *Parliamentary Lists of the Early Eighteenth Century: Their Compilation and Use*, Leicester, 1973; *A Register of Parliamentary Lists 1660-1761*, Leicester, 1979.
- (2) W. A. Speck & W. A. Gray, 'Computer Analysis of Poll Books: An Initial Report', *B. I. H. R.*, XLIII, 1970; W. A. Speck, W. A. Gray & R. Hopkinson, 'Computer Analysis of Poll Books: A Further Report', *ibid.*, XLVIII, 1975; N. Landau, 'Independence, Deference, and Voter Participation: The Behaviour of the Electorate in Early-Eighteenth-Century Kent', *H. J.*, XXII, 1979; G. S. Holmes, *The Electorate and the National Will in the First Age of Party*, Lancaster, 1979; J. A. Phillips, 'The Structure of Electoral Politics in Unreformed England', *Journal of British Studies*, XIX, 1979; *idem*, *Electoral Behavior in Unreformed England: Plumbers, Splitters, and Straights*, Princeton, N. J., 1982.
- (4) H. Horwitz, *Parliament, Policy and Politics in the*

Reign of William III, Manchester, 1977.

- (15) そうした解釈にもとづく論点の整理は G. Holmes ed., *Britain after the Glorious Revolution 1689-1714*, 1969.

- (16) わが国ではプラム以下ホームズ、スペックらを「ネオ・ホイッグ」と呼ぶ例もみられるが、これは必ずしも適切な命名法とはいえないように思われる。以下ではこれにかわって、アン女王治世までの党派対立の再確認者たちを「第一世代」、初期ハノーヴァー朝期の党派対立の残存を主張する以下のクルクシャンクス、コリーらを「第二世代」と呼ぶことにするが、もとよりこれは便宜的なものにすぎない。

- (17) W. A. Speck, *Stability and Strife: England 1714-1760*, 1977.

- (18) G. Holmes & W. A. Speck, *The Divided Society: Party Conflict in England 1694-1716*, 1967.

- (19) R. Sedgwick ed., *House of Commons 1715-1754*, 2 vols., 1970.

- (20) 議会史研究財団 (History of Parliament Trust) の公式研究はネイミア史学の牙城とみなされがちであるが、一九八二年以来公刊されている年次紀要 *Parliamentary History* にみられるように、近年の研究成果はめづめづしいものがある。ネイミアの創出した伝記的方法是従来厳しい批判を浴びてきたが、いっそう吟味されて活用されれば、政党

制確立以前の議会史研究の方法として有益であることは疑いがない。

- (21) [F. Cruickshanks], 'Introductory Survey', in Sedgwick ed., *op. cit.*, I.

- (22) Sir Lewis Namier, *England in the Age of the American Revolution*, n. e., 1961, pp. 179-80, 191.

- (23) これをめぐって近年シャロベイトへの関心が急速に高まっている。E. Cruickshanks, *Political Untouchables: The Tories and the '45*, 1979; do. ed., *Ideology and Conspiracy: Aspects of Jacobitism 1689-1759*, Edinburgh, 1982; P. S. Fritz, *The English Ministers and Jacobitism between the Rebellions of 1715 and 1745*, Toronto, 1975; W. A. Speck, *The Butcher: The Duke of Cumberland and the Suppression of '45*, Oxford, 1981. なお大久保桂子「つまなせシャロベイトなのか」(『イギリス史研究』三七、一九八五年)に若干の紹介がある。
- (24) B. W. Hill, *The Growth of Parliamentary Parties 1689-1742*, 1976.

- (25) J. Owen, *The Eighteenth Century 1714-1815*, 1974.

- (26) L. Colley, *In Defiance of Oligarchy: The Tory Party 1714-1760*, Cambridge, 1982.

- (27) cf. W. A. Speck, 'Whigs and Tories Dim their Glories: English Political Parties under First Two Georges', in J. Cannon ed., *The Whig Ascendancy*:

Colloquies on Hanoverian England, 1981; L. Colley, 'The People Above in Eighteenth Century Britain' (Review Article), *H. J.*, XXIV, 1981.

- (8) 一七八〇年代の党派構造の転換がもたらした問題となす。J. C. D. Clark, 'The Decline of Party, 1740-1760', *English Historical Review* (以下 *E. H. R.*), XCIII, 1978; *idem*, 'A General Theory of Party, Opposition and Government 1688-1832', *H. J.*, XXIII, 1980; *idem*, *The Dynamics of Change: The Crisis of the 1750s and the English Party Systems*, Cambridge, 1982; B. W. Hill, *British Parliamentary Parties 1742-1832*, 1985.

- (9) この点については解説が最近の名著である。cf. J. R. Jones, *The Revolution of 1688 in England*, 1972; J. R. Western, *Monarchy and Revolution*, 1972. この点については Horwitz, 'Parliament and the Glorious Revolution', *B. I. H. R.*, XLXII, 1974; L. G. Schworer, *The Declaration of Rights 1689*, Baltimore, 1981; C. C. Weston & J. R. Greenberg, *Subjects and Sovereigns: The Grand Controversy over Legal Sovereignty in Stuart England*, Cambridge, 1981.

- (10) J. P. Kenyon, *Revolution Principles: The Politics of Party 1689-1720*, Cambridge, 1977.

- (11) ケリヨンの反ホイッグ的解釈がローリー理論の論理となす。cf. G. M. Straka, *Anglican Reaction to the*

- Revolution of 1688*, Madison, Wisc., 1962; G. V. Bennett, *The Tory Crisis in Church and State 1688-1730: The Career of Francis Atterbury*, Bishop of Rochester, Oxford, 1975. この点については思想史(歴史)の名著。H. T. Dickinson, 'The Eighteenth Century Debate on the "Glorious Revolution"', *History*, LXI, 1976; J. Dunn, 'The Politics of Locke in England and America in the Eighteenth Century', in J. W. Yolton ed., *John Locke: Problems and Perspectives*, Cambridge, 1969; M. P. Thompson, 'The Idea of Conquest in Controversies over the 1688 Revolution', *Journal of History of Ideas*, XXXVIII, 1977; M. Goldie, 'Edmund Bohun and *Jus Gentium* in the Revolution Debate 1689-1693', *H. J.*, XX, 1977; *idem*, 'The Roots of True Whiggism 1688-94', *History of Political Thought*, I, 1980; R. Ashcraft & M. M. Goldsmith, 'Locke, Revolution Principles, and the Formulation of Whig Ideology', *H. J.*, XXVI, 1983.
- (12) B. Bailyn, *The Ideological Origins of the American Revolution*, Cambridge, Mass., 1967; *idem*, *The Origins of American Politics*, New York, 1968 (田中保太郎訳『アメリカ政治の起源』東大出版会、一九七五年); J. G. A. Pocock, 'Machiavelli, Harrington and English Political Ideologies in the Eighteenth Century', in Pocock, *Politics, Language and Time*, New York,

- 1973; idem, *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition*, Princeton, N. J., 1975. 邦語による紹介は佐々木武「北大西洋思想史圏を求めて」(『社会思想史研究』二〇、ネルヴァ書房、一九七八年)および大久保桂子「一七七八世紀イギリス思想史における『宮廷』と『地方』の概念」(『イギリス史研究』二九、一九八〇年)。
- (33) I. Kramnick, *Bolingbroke and his Circle: Politics of Nostalgia in the Age of Walpole*, Cambridge, Mass., 1968; H. T. Dickinson, *Liberty and Property: Political Ideology in Eighteenth-Century Britain*, 1977. 「宮廷」側思想の分析は R. Browning, *Political and Constitutional Ideas of the Court Whigs*, Baton Rouge and London, 1982.
- (34) ポーロックの近年の関心は一八世紀の欧米における商業・信用社会の到来に対する思想的対応と、その展望とを扱った『ポロックとポロック』J. G. A. Pocock, *Virtue, Commerce and History*, Cambridge, 1985.
- (35) cf. D. Hayton, 'The "Country" Interest and Party System, 1689-c. 1720', in C. Jones ed., *Party and Management in Parliament 1660-1784*, Leicester, 1984.
- (36) ひびの解釈は Q. Skinner, 'The Principles and Practice of Opposition: The Case of Bolingbroke versus Walpole', in McKendrick ed., *op. cit.*
- (37) e. g. 'The Public, Literature and the Arts in the Eighteenth Century', in J. H. Plumb, P. Fritz & D. Williams eds., *The Triumph of Culture: Eighteenth-Century Perspectives*, Toronto, 1972; *The Commercialization of Leisure in Eighteenth-Century England*, Reading, 1973; 'Commercialization and Society', in N. McKendrick, J. Brewer & J. H. Plumb, *The Birth of a Consumer Society: The Commercialization of Eighteenth-Century England*, 1982.
- (38) G. Holmes, 'The Achievement of Stability: The Social Context of Politics from the 1680s to the Age of Walpole', in Cannon ed., *op. cit.*
- (39) G. Holmes, *Augustan England: Professions, State and Society 1680-1730*, 1982.
- (40) J. Black ed., *Britain in the Age of Walpole*, 1984.
- (41) J. Black, 'Introduction: An Age of Political Stability?', *ibid.*
- (42) e. g. P. Langford, *The Excise Crisis: Society and Politics in the Age of Walpole*, Oxford, 1975. この一八世紀政治史へのアプローチは青木康氏によつて世紀後半に適用されている。本稿の対象外の時代ではあるが、青木康「ネーミア以後のイギリス一八世紀政治史——一七六〇年代をめぐる最近の研究——」(『史学雑誌』八九、一九八〇年)も研究史の整理として示唆に与る。

- (39) e.g. J. Corfield, *The Impact of English Towns 1700-1800*, Oxford, 1982; P. Clark ed., *The Transformation of English Towns 1600-1800*, 1984. ロンズン研究²⁶ N. Rogers, 'Money, Land and Lineage: The Big Bourgeoisie of Hanoverian London', *Social History*, IV, 1979; *idem*, 'Resistance to Oligarchy: The City Opposition to Walpole and His Successors 1725-47', in J. Stevenson ed., *London in the Age of Reform*, Oxford, 1977; *idem*, 'Aristocratic Clientage, Trade and Interdependency: Popular Politics in Pre-Radical Westminster', *P.P.*, 63, 1973; I. G. Doolittle, 'Walpole's City Election Act (1725)', *E.H.R.*, XC VII, 1982. 近藤和彦氏のマンチエスター研究(例えが)「シム・ハンヤン・シム」『プロテストメントの倫理と資本主義の精神』(『思想』三一四'一九八三年)などが挙げられた成果を収めた²⁷ 今後のこの分野の深化が期待される。
- (40) N. Sykes, *Church and State in England in the Eighteenth Century*, Cambridge, 1934; *idem*, *Edmund Gibson, Bishop of London*, Oxford, 1926; Bennett, *op. cit.*; G. V. Bennett & J. D. Walsh ed., *Essays in Modern Church History in Memory of Norman Sykes*, 1966; R. F. J. Kendrick, 'Sir Robert Walpole, the Old Whigs and the Bishop, 1733-36: A Study in Eighteenth-Century Parliamentary Politics', *H.J.*, XI, 1968; N. C. Hunt, *Two Early Political Associations: The Quakers and the Dissenting Deputies in the Age of Sir Robert Walpole*, Oxford, 1961; F. Baker, *John Wesley and the Church of England*, 1970; A. Armstrong, *The Church in England, the Methodists and Society 1700-1850*, 1973.
- (41) D. Rollinson, 'Property, Ideology and Popular Culture in a Gloucestershire Village 1600-1740', *P.P.*, 93, 1981; N. Rogers, 'Popular Protest in Early Hanoverian London', *ibid.*, 79, 1978; E. P. Thompson, *Whigs and Hunters: The Origins of the Black Act*, 1975; D. Hay, P. Linebaugh & E. P. Thompson, *Albion's Fatal Tree: Crime and Society in Eighteenth-Century England*, 1975; J. Brewer & J. Styles eds., *An Ungovernable People: The English and Their Law in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*, 1980; T. Hayter, *The Army and the Crowd in Mid-Georgian England*, 1978; J. Stevenson, *Popular Disturbances in England 1700-1870*, 1979; J. Beattie, 'The Pattern of Crime in England 1660-1800', *P.P.*, 62, 1974; J. H. Langbein, 'Albion's Fatal Flaws', *ibid.*, 98, 1983; L. Colley, 'Eighteenth-Century Radicalism before Wilkes', *Transactions of the Royal Historical Society*, 5th ser., XXXI, 1981; H. T. Dickinson, 'Popular Politics in the Age of Walpole',

in Black ed., *op. cit.* 邦語では近藤和彦「一七二五年マ
ンチェスタにおける『恐るべき群衆』」(長谷川博隆編『ヨ
ーロッパ——国家・中間権力・民衆』名古屋大学出版会、
一九八五年)が前記のマンチェスター研究の一環としても
注目される。

- (46) J. Cannon, *Aristocratic Century: The Peerage of
Eighteenth-Century England*, Cambridge, 1984.
- (47) L. Stone & J. C. F. Stone, *An Open Elite? England
1540-1880*, Oxford, 1984.
- (48) I. R. Christie, *Stress and Stability in Late Eigh-
teenth-Century Britain*, Oxford, 1984.